

ブック村だより

GATEWAY20周年に向けて	(1)
人生を変えるきっかけになった本...?!	大島 安奈 (2)
Books Now : 新入生に贈る一冊	(4)
『われはロボット』	谷岡 一郎
『三十歳の君へ』	初谷 勇
『税金の世界史』	下山 晃
『暇と退屈の倫理学』	河辺 純
本学コレクション紹介(38) : リスト『著作集』⑥	森岡 邦泰 (6)
第7回大商大ブチエッセイ大賞 受賞作品決定	(7)
2021年度後期 LSS(図書館学生スタッフ)活動紹介	
Information	(8)

GATEWAY20周年に向けて

U-メディアセンター GATEWAYは、「知的交流」、「知の実践」の場となることを願い、また「学問への登竜門」の意図を込めて2002(平成14)年9月30日にオープンし、今秋20周年を迎えます。

歴史をひもとくと、本学図書館は1949(昭和24)年大阪商業大学の前身である大阪城東大学の設立と同時に設置されました。『谷岡学園五十年史』によると、当時は2つの教室を図書館として使用し、蔵書数約2万冊、スタッフは館長、副館長、館員3名での開館でした。その後3度の移転を経て、1968(昭和43)年には初の独立棟図書館として開館し、ラテン語で智慧のある人を意味する「HOMO-SAPIENS(ホモ・サピエンス)」と命名されました。この建物は現在の2号館Re/Ra/Ku(リラク)で、今も図書館分室として製本雑誌などを配架しており、他にも学生相談室やコンビニエンスストアなどが入っています。今のGATEWAYに移転するまでの34年の間に、蔵書数は約35万冊に成長しました。

現在、図書館の蔵書数は約53万冊。昨年9月図書館システムを更新した際、学園設置校である神戸芸術工科大学と蔵書データベースを統合し、合わせて約68万冊の一体的な検索と利用を可能にしました。経済・経営・公共分野の資料が充実した本学図書館と、豊富なデザイン・アート関連資料を備えた神戸芸術工科大学情報図書館の資料を両大学の学生・教職員に提供しています。今後は、さらに電子書籍・データベースの充実も図っていきます。

二十歳を迎え、開館時の思いも新たに進化を続けるGATEWAYにご注目ください。

人生を変えるきっかけになった本…?!

公共学部 公共学科
専任講師 大島 安奈

「人生を変えるきっかけになった本……？」
これは、私が「ブック村だより」への寄稿依頼を受けたときの正直な心の声である。人生のその時々で面白いと思う本はあるが、私の「人生を変えた」本といわれた時、すぐに思い浮かぶ本がなかった。これは私の読書量の未熟さゆえだと思うが、今回の依頼をきっかけに、私は30年ほどのこれまでの人生と本との関わりを回想することになった。1つの本を詳しく紹介しようかとも思ったが、恥じらいもなく、ありのままに振り返ってみようと思う。みなさんも一緒に、自身の読書歴を振り返りながら読み進めていただきたい。

私の本との最初の出会いは、幼少期に母から読み聞かせてもらった童話の世界だったと思う。『三びきの子ぶた』『ジャックとまめの木』『ウサギとカメ』『マッチウりの少女』『あかずきんちゃん』『かさじぞう』『ももたろう』『おむすびころりん』『おおきなかぶ』といった世界の童話から非日常の異世界を感じ、ワクワクしながら聴いていたことを思い出した。そうそう、父方の祖母が語ってくれる自作の「怖い話」も大好きで、最後の決まりゼリフ「見たろ～～!!」が聞きたくて、毎回楽しみにしていたことも思い出した。(笑) そういえば、小学校低学年の頃、空想の世界を創造することが楽しくて、物語をつくることに夢中になり、8つ離れた妹に読み聞かせをしたこともあった。

小学生の頃、世界の偉人伝を読むことが好きだった。偉人伝を読むようになったきっかけはハッキリとは覚えていないが、小学校の朝の読書タイム(毎朝15分程)で読む本を図書館に探しに行ったときにピックアップしたのだろう。『ヘレン・ケラー』『マザー・テレサ』『アンネ・フランク』『キュリー夫人』『ナイチンゲール』など、今思うとなぜか女性の偉人伝ばかり好んで読んでいた。特に、ナチスの迫害を逃れ、1942年6月から1944年8月ま

での約2年間、隠れ家で書き綴られた『アンネの日記』は、自身と年齢の変わらない少女の言葉から伝えられる戦時下の現実への衝撃を受けるとともに、いつ見つかるかわからないという恐怖のなかでも、最後まで希望を捨てずに夢を持ち続けたアンネの姿に、心を突く何かを感じたことを覚えている。

中学生、高校生の頃・・・思い返すが、小学生の頃までの読書好きが、いつの頃からか読書から離れていたことに気付く。授業後の部活動に汗を流し、学習塾にも通うようになり、いつの間にか楽しむための読書をする習慣がなくなっていた。読んでいた書物といえば、志望高合格のために必要な科目のテキストや参考書であり、テストのための勉強、型にはまった学習スタイル、当時は何の疑問も持たずに、目の前に課された課題をこなすことが目標達成の近道であると思っていたのだろう。

大学生の頃、女子サッカー部に入部し、サッカーにドハマリして、年中サッカーに明け暮れた。そのとき読む本といえば、サッカーの指南書の類であり、「どうすればサッカーがもっと上手くなるか」で頭がいっぱいだった。今考えれば、なかなか珍しい女子大生だったのかもしれない。(笑)しかし、大学2年生の終り頃、学術書に関心を持つ転機がやってきた。女子サッカー部でキャプテンになったことがきっかけである。チームをまと



『アニメ絵本 アンネの日記』

アンネ・フランク 原作
大石 好文 文
(理論社、1996年)

めるにはどうすれば良いか、メンバーのモチベーションを上げるにはどうすれば良いか、どのようなリーダーシップをとれば良いか、それまでの考えの中心だった個の技能の向上以外にも視野が広がった。そんな時、大学の授業で「経営学」を受講した。経営学を受講したのは、必須科目だったからであり、正直に言えばあまり関心がなかった。しかし、キャプテンとしてチームを率いるうえでの疑問を解く糸口が、まさか「経営学」の授業のなかにあるとは！なるほど、企業にしろ、スポーツチームにしろ、人が協働しながら組織の目標達成を目指すことに違いはなく、先人たちが積み重ねてきた理論・議論（リーダーシップ論、モチベーション論など）があるということに面白さを感じ、ワクワクした。その時に読んだ本の1つを紹介したい。

『Jリーグの行動科学』である。本書は、リーダーシップとキャリアを中心に、Jリーグに関することを論じている。なかでも、特に印象深く、調査研究が面白いと思った内容が、トップ・アスリートの引退時の心理的過程が、末期患者の死に至る過程と類似する精神的プロセスを経るといふものである。Jリーガーを対象に、引退時の心理的過程についてインタビューを行っており、得られた言語データを、キューブラー・ロスによって見出された死に至る精神過程をもとに考察している。その過程は、「第1段階：否認」→「第2段階：怒り」→「第3段階：取り引き」→「第4段階：抑鬱」→「第5段階：受容」とされる。一見、無関係のように思える末期患者とJリーガーだ



『Jリーグの行動科学』

高橋 潔 編著
(白桃書房、2010年)
請求記号:783.47/Ta33
資料番号:0559331

が、心理的過程を抽象化し、その構造を読み解くことで、共通性が浮かび上がることが興味深く、実践と理論がつながることが面白いと思ったことを思い出した。

このように、興味関心の無いと思っていたことや、問題の解決には何ら関係のないように思えることが、思いがけず、ヒントやアイデアを与えてくれることがある。さらには、思いもよらぬ人生が展開することもある。幅広い分野に視点を向け、読書をするのもそうであるが、色々なことにチャレンジすることで、それまで点と点に見えていた世界が線でつながり、さらにはすべては1つの道につながっているのではないかと思える。

大学院修了後、私は大学卒業後から始めた女子ラグビーで、選手としてチャレンジしたいと実業団に入るが、志半ばでケガをし、手術、リハビリ生活を送ることになる。しかし、ケガによる「不便」を経験したことで、障害に関心をもつようになった。これまで目を向けていなかった世界に視野が広がり、現在は「障害のある人の観光」をテーマに研究を行っている。

今回の寄稿をきっかけに、本との関わりを振り返ってみると、知らぬ間に人生に影響を与えていたことに気付いた。筆者の経験談が色濃くなってしまったが、本を読むきっかけ、何かにチャレンジするきっかけに、微力ながらつながれば嬉しく思う。ぜひ、興味のない(と思い込んでいる)分野の本にも目を向け、読書を楽しんでほしい。思わぬ扉が開けるかもしれない。

◆図書館所蔵の『アンネの日記』から一冊

オススメ



『グラフィック版 アンネの日記』

アンネ・フランク著
アリ・フォルマン編
デイビッド・ポロンスキー絵
深町 真理子訳
(あすなろ書房、2020年)
請求記号:949.3/F44
資料番号:0549314

『われはロボット』

アイザック・アシモフ 著、小尾 芙佐 訳
(早川書房, 1983.11)

請求記号:933.7/A92
資料番号:0559700

「ロボット」という概念の普及に、大きな役割を果たした3人を(個人意見で)選ぶとすれば、チェコのカレル・チャペック(『RUR』という戯曲の中で、初めて機械人間というコンセプトを出した)、日本の漫画家 手塚治虫(『鉄腕アトム』や『魔神ガロン』などを描いた)、そしてその中間期にロボットに関する連作短編を発表したアメリカのSF作家、アイザック・アシモフになります。

特に当時30歳になったばかりだったアイザック・アシモフによって、1950年にまとめられた短編集『われはロボット』は、有名な「ロボット工学の三原則」を打ち出したことでも知られています。これは「アトム」の中でも、その他多くの作品の中でも応用されました。ひ

よつとするとこれからAIが意識を持つ時代が来ないとは限りませんが、はたしてこの三原則の目的・内容を保障できる工学技術は可能なのでしょうか。ロボットが自我や感情を持ったとして、それに対し人間はどう考え、行動すべきでしょうか。また人間とロボット、あるいはアンドロイドやサイボーグとの境界はどう定義されるのでしょうか。それらの問題点が半世紀以上前に提起されていたのは驚きですが、いずれにせよ考える良い機会ですから、新入生諸君に(そして在學生に)本書をお薦めします。

9つの短編のうち、「ロビィ」と「うそつき」は名作中の名作。哲学する(かもしれない)ロボットの感動物語を是非堪能してほしいものです。

(学長 谷岡 一郎)



『二十歳の君へ』

東京大学立花隆ゼミ・立花 隆 著
(文藝春秋, 2011.1)

請求記号:367.6/To46
資料番号:0462098

『文藝春秋』で立花隆の「田中角栄研究」を見たのが大学1年の秋。3年の夏休み、所用で都内にいたとき前首相逮捕の報に接した。と、昔語りをゼミ生にしたら、立花隆も田中角栄もほとんど知らないという。だからというわけでもないが、^{はたち}前後の皆さんに、本書をお薦めしたい。

「第一章 二十歳、扉をたたく」は、「まだどこのなにもでもない、来る日も来る日もただひたすら思い悩んでいるばかりの大学生」たちが、「もう一歩前へと進むための足がかりを求めて、『かつての二十歳』のもとを訪ね」た16本のインタビュー集。リリー・フランキーに始まり、森見登美彦、藤子不二雄[Ⓐ]や宮台真司が並ぶ。

「第二章 二十歳、頭をひねる」は、序、死、顧、進、考、疑と一字題を冠した6節。立花隆がゼミで行った連続6時

間の濃密な講義を再現。

立花は語りかける。今後の社会のダイナミックな変化を「ほぼ確実に目にする」「君たちは、常に長い目で未来を見据えて、その上でいろんなものを考えていってください。特に人文社会的な歴史、つまり政治とか経済とかが関わる世界というのは、最低でも半世

紀のスパンでもものを見る目を養っておかないといけません。いや、今は本当はそれ以上に百年、二百年のタイムスパンでものを考えなければいけない時代なんです。」

「第三章 二十歳、思いわずらう」は、立花ゼミ生14人の手記。今、同世代となった皆さんなら、どんな感想をもつだろう。(文中敬称略) (図書館長 教授 初谷 勇)

※2021年立花隆氏の没後、本書第二章は再編集され、『東大生と語り尽くした6時間 立花隆の最終講義』文藝春秋、2021年として新書化された。



『税金の世界史』

ドミニク・プリスビー 著, 中島 由華 訳
(河出書房新社, 2021.9)

請求記号:345.2/F47
資料番号:0558015

給料明細をもらうたびにムカつくのは、あまりにも多額の税金が毎月引かれていることである。タバコを吸うたびにムカつくのは、多額納税しているのに、タバコの成分や禁煙運動のはじまりの歴史なんか一度も調べたことのない多数の人たちから、やたらと煙たがられることである。税金のことを考えるたびにムカつくのは、相続税・法人税逃れのために財団を作ったにも関わらず、ビル・ゲ●ツさんがやたらと尊敬されたりしていることである。ゲ●ツさん、コロナ騒動前にワクチン普及財団設立してWHOに巨額の出資、騒動展開中の今は、史上最高収益(9兆円超え)ゲットを継続中。先見の明があるから? ぼくにはそうとは、とうてい、思えませんわ。

皆さんは卒業後、どんな仕事に就いても税金を支払わなければなりません。ですから、税金のことはしっかり考えておかななくてはなりません。なのですが、税金ってそもそも何? をわかりやすく教えてくれる本は案外少ないのです。



で、手始めにこの本で世界の税金の歴史を学んでみましょう。この本がオススメなのは、今後のグローバル社会の税金のあるべき姿についてもさまざまなヒントを与えてくれること。「税とは、われわれの子供たちが暮らす未来を形づくるための手段である」と書かれていて、21世紀型のより良い税制の構築を呼びかけています。すべての社会人にとっての、重大問題、です。

(総合経営学部 教授 下山 晃)

『暇と退屈の倫理学』

國分 功一郎 著
(新潮社, 2021.12)

請求記号:104/Ko45
資料番号:0559697

この世の中、わかっていることよりもわからないことが多い。私たちはそれらをたいてい、「まあ、いいか」と何となくやり過ごしたり、妥協しながら生活している。この「まあ、いいか」を「なぜ/どうして」とトコトン突き詰めてみるのが、哲学であり倫理学という学々の役割である。

本書は〈暇と退屈〉について、じっくり考えてみようという狙いがある。今皆さんは大学生になって、多くの課題に向き合わなければならない刺激の多い毎日で、ストレスを感じているかもしれない。まじめな学生は早くそれらを片付けて、気晴らししたいなあと思う。つまり、〈暇〉な時間が欲しいなあと思う。しかし、〈暇〉な時間が続くと〈退屈〉になり、退屈すぎると苦痛になって何らかの刺激でそれを埋めようとするだろう。この悪循環を繰り返す

のが人間の本性であり、この悪循環から抜け出せないのが人類の歴史である。さらに近代以降、この気晴らしと退屈の悪循環を加速させることに企業活動が大いに関わり、商品やサービスで手軽に退屈を克服してくれることに、多くの哲学者は悲観的であった。



アンドロイド(人間酷似型ロボット)の研究者は、ロボットの研究をするのは人間が楽になるためではなく、人間の創造力や可能性を徹底的に考え抜くためであると言う。同じように、〈暇と退屈〉を魅力的な消費活動で埋めることなく、自らが積極的に楽しむことを「ああでもない、こうでもない」と「哲学する」ことこそが人間の幸福であることを本書は気付かせてくれる。学生時代にこそ、本書片手に「哲学する」ことを経験してみてもはどうだろうか。

(総合経営学部 教授 河辺 純)

リスト『著作集』⑥

リストの主張の一つが生産力と価値を区別する議論である。スミス以来経済学は、次第に価値の理論に特化してきた。今の用語でいえば、価格理論に特化してきた。しかしリストには文明論がある。ある国民の状態は、あらゆる世代のあらゆる発見、発明、改良、完成、努力の堆積の結果である。

しかし経済学は文明化が生み出す生産力を見落とした。価値の理論だけからは、最も安く買えるところから商品を買うべきであるとか、外国でもっと安く手に入るようなものを自国で製造するのは馬鹿げた振る舞いであるとか、保護関税は国民を犠牲にして産業活動を営む者に独占を与えるとか、言われてきた。確かに保護関税は当初、工業製品の価格を騰貴させるかもしれない。しかし工業力を発展させる能力のある国民にあっては、やがてこれらの製品は外国から輸入するより安く国内で作れるようになるのである。保護関税によって価値の点で犠牲が払われるとしても、生産力の獲得によって補償されるのである。

こうしたリストの主張は、今日の経済学がしばしば「技術が所与なら」という仮定をおいて価格理論を組み立てるとき、その仮定自体が無意味であることを示唆している。それよりもその技術を改良する発見、発明、それを可能にする社会制度こそが肝心であり、それこそがリストのいう生産力であり、そうした生産力を上げるためにはどうすべきかを考えることの方が重要であると説いているのである。それはまた、明治以来の日本の工業化の歴史でもあった。

もし支配的な経済学のように生産力の理論に従って判断すべき事態を価値の理論に従って判断したらどうなるか。たとえばイギリスが工業力において優位に立っていたリストの時代、イギリスが輸出奨励金を与えフランスが保護関税を取らなければ、フランスの消費者は数年の間は工業製品を

より安く買えるだろう。しかしフランスの工業は破滅し、幾百万の人々が乞食をする羽目に陥ったり、仕事がなくなって国外移住を余儀なくされたり、農業に身を委ねたりするだろうという。またイギリスが新しい発明によって、古い作業方法でドイツ人が製造するより40パーセント安く亜麻布(リネン)を製造できるようになるとき、保護関税がなければドイツの工業部門の一つは破滅するという。それは今日でも、イギリス国民が、一つには仕事のないほかのEU諸国からの労働者の流入に反発してEU離脱を支持したことからも分かるように、現代的な問題であろう。

偉大な政治家はみな、国民の富と文明と国力に及ぼす工業の力とそれを保護する必要性を認識していた。フリードリヒ大王(注)もワシントンもナポレオンもそうであった。理論の深奥を究めなくても直観的に正しく理解していた。重農学派が初めて^{きべん}詭弁的な推論によってこれを別様に解釈し、重農学派の空中楼阁が消え去った後、新しい経済^{ごびゅう}学派が生まれたが、本質的な誤謬からは解放されていなかった。つまり政治家が直観的に見て取っていたことを、経済学は見えていなかったとリストはいうのである。(経済学部 准教授 森岡 邦泰)

(注)18世紀後半のプロセイン(後のドイツ帝国)の国王。強大な軍隊を保持し弱小国だったプロセインをヨーロッパの列強にまで高め、大王と言われた。

◆図書館所蔵のリストに関する本から一冊 オススメ



『経済と国民
フリードリヒ・リストに
学ぶ』
中野 剛志 著
(朝日新聞出版、2017年)
請求記号:331.5/N39
資料番号:0528361

第7回大商大プチエッセイ大賞 受賞作品決定

大商大プチエッセイ大賞は、本学学生がエッセイという形式で自分の考えていることや感じていることを、自由に表現する文章力を養うことを目的に2014年度から実施しています。

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のための利用制限等で、長らくご来館いただけていない卒業生・一般利用登録者の部門を設け、図書館とのつながりを温め、はぐくむ機会としたところ、「学部生・大学院生の部」に21件、「卒業生・一般利用登録者の部」に6件の応募がありました。

厳正な審査により次の10件が各賞に選ばれ、10月30日(土)に一般利用登録者の受賞者もご参加いただき授賞式を開催しました。

受賞作品は、2階館内掲示板に掲載しています。ぜひ、ご一読ください。

図書館長賞

<学部生・大学院生の部>

「私の理想の図書館」

公共学科3年 弓岡 郁菜子

<卒業生・一般利用登録者の部>

「命はめぐりめぐるもの」

ひろちゃん (P.N.)

優秀賞

<学部生・大学院生の部>

「図書館という幻想的な世界」

経済学科2年 チワワ (P.N.)

「私が目指したもの」

経済学科4年 かにカニはまかぜ (P.N.)

「好きと嫌い」

経営学科4年 rodent (P.N.)

<卒業生・一般利用登録者の部>

「知的好奇心を刺激する大学図書館を考える」

「知的資源としての大学図書館の社会的活用に向けて」

MAX (P.N.)

審査員特別賞

<学部生・大学院生の部>

「ファーザー・コンプレックス」

経営学科4年 川寄 太雅

「図書館利用で学生生活をおトクに！」

公共学科3年 かみやまひろ (P.N.)

<卒業生・一般利用登録者の部>

「年寄りの言う事は」

おかや くらべい (P.N.)



▲受賞者記念写真

2021年度後期 LSS(図書館学生スタッフ)活動紹介

Library Student Staff (LSS) は、学生の目線で利用したい図書館づくりを目指して2018年7月に発足し、図書館を盛り上げるためにさまざまな企画や図書館で行うイベントの運営をサポートしています。

2021年度後期は、メンバーも22人となり、①定例ミーティング(毎月2回)、②Twitterでメンバーが毎週水曜日におすすめ本を紹介、③LSSと古都研究会の合同企画展示「五黄の寅〜千里の藪を駆ける〜」、④企画展示「オリックス・バファローズ リーグ優勝記念」、⑤古書リサイクル企画「古本市」を実施。また、2年ぶりに対面で開催した⑥「読書会」ではLSSが司会進行を務め、⑦「学生選書ツアー」(於: MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店)では受付や選書された書籍の所蔵確認などを行いました。



▲「オリックス・バファローズリーグ優勝記念」



▲「LSS古本市」(於: GATEWAY)



▲「読書会」(於: リアクト)

Information

■ 新型コロナウイルス感染拡大防止対策

- ・マスク着用、手指消毒
 - ・入館時検温
 - ・館内換気、閲覧席のセルフ消毒
 - ・閲覧席の一部利用制限
 - ・館内での会話、飲食の禁止
 - ・カウンター窓口のビニールカーテン、閲覧席の亚克力板設置
- 引き続きご理解とご協力をお願いいたします。

■ 開催中の企画展示 (2階)

- ・「新入生対象に新生活に役立つ本」5/31(火)まで
- ・「本で世界を旅しよう」5/31(火)まで
- ・「五黄の寅一千里の藪を駆ける」(LSS×古都研究会合同企画)6/30(木)まで

■ 本学教員著書紹介

本学教員が学内出版助成制度を活用して刊行し、図書館に寄贈のあった学術図書を図書館ホームページで紹介・発信しています。

[2021年度寄贈] 下山 晃 『奇跡の地図を作った男 カナダの測量探検家デイヴィッド・トンプソン』大修館書店、2021年 (請求記号:289. 3/Th6)

※本館報第54号「Books Now」で谷岡学長より紹介されたほか、産経新聞、東京新聞、毎日新聞など多数の書評欄にも掲載されました。

配架場所は、2階「ブック村だより」コーナー(書架番号:202B)です。

■ 大阪商業大学学術情報リポジトリへの掲載

この図書館報「ブック村だより」が、図書館ホームページから「大阪商業大学学術情報リポジトリ」(URL:ouc.repo.nii.ac.jp)でもご覧いただけるようになりました。

■ 写真部と漫画研究会の作品展示

2階入館ゲート横の展示ケースに写真部と漫画研究会の作品を展示しています。それぞれのクラブに興味のある学部学生は、総合体育館2階課外活動支援課へお問い合わせください。

■ 2021年度後期 関連委員会報告

第3回図書館委員会(臨時会)

2021年11月11日(木)

※S-Navil上でリモート開催

議題:〔審議〕図書寄贈申し出への対応
について

〔報告〕①2021年度特別研究図書
選定結果、②2021年度図書館事
業中間報告、③今後の事業 等

第4回図書館委員会

2021年12月14日(火)

議題:〔審議〕2021年度図書資料の除
籍について

第1回学術情報リポジトリ運営委員会

2022年3月15日(火)

議題:〔報告〕学術情報リポジトリの登
録状況 等

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、開館時間が変更になっています。

詳細は、図書館1階掲示板・館内配布チラシ・図書館ホームページ等をご確認ください。

【編集発行】大阪商業大学図書館

大阪商業大学図書館報「ブック村だより」第55号 令和4年3月31日発行

〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10

TEL: 06-6781-5280

E-mail: lib@oucow.daishodai.ac.jp

URL: <https://ouc.daishodai.ac.jp/lib/>

Twitter: @OUC_Lib

QRコードを読み取ると、
図書館ホームページへ
アクセスできます。

